

日本古来の道徳や情緒

「寺子屋では、『読み書きそろばん』だけを学ぶのではなく、たとえば、孔子をはじめとした先人の教えである『仁義礼智信忠孝』などを学んでいました。これが、『日本人の心』を形成していたのだと思います」。

宮城県白石市から登別市に片倉家が移住してきてから約150年。現存する限られた文献から移住当時の歴史をひもとき、当時の教育の一部を反映させた『寺子屋体験学習』では、武士道や孔子の教え、日本の格言などを取り入れた特色のある講義が行われています。

小林さんは、「教育においては学力の向上に重きを置くことも大切ですが、私たちは、日本古来の道徳や情緒、自然に対する感受性などを、もつと子どもたちに伝え



▲寺子屋の『師匠』たち（左上から齊藤俊之さん・小塚順一さん・佐々木哲弘さん、左下から堤厚さん・小林さん・武田光廣さん）



▲子どもたちに伝授する小林さん

ていきたいと思っています」と話します。

寺子屋の講義では、傘をさしている人同士がすれ違うときに人がいない外側に傘を傾ける『傘かしげ』や、ナスの花にたとえて親の忠告の大切さを説く『親の意見と茄子の花は千に一つも無駄はない』など、日本古来の作法やことわざを多く紹介しています。教授される子どもたちは、昔の人の心遣いや情緒に感動し、目を輝かせて真剣に講義を聴くそうです。

もつと多くの方に

寺子屋体験学習が始まってから14年。小林さんは、「もつと多くの方に来てもらいたい」と話してくれました。

「江戸時代の心や感性、自分の手で『もの』をつくりあげる感動は、忙しい現代人の心にうるおいを与えてくれます。少しでも多くの方に伝えていきたいですね」。師匠たちは、今日も『日本人の心』を伝えています。



KIRARI

こばやし まさあき
小林正明さん（常盤町）

江戸時代に全国的に発展した私設の教育機関である寺子屋は、庶民の日常生活にとって実用的な教育を行っていた施設です。その当時の教育の一部を取り入れ、子どもたちに日本古来の文化や道徳、登別市の歴史を伝える事業が登別伊達時代村で行われています。

登別伊達時代村の『寺子屋体験学習』は、『寺子屋』で日本の格言やことわざの講義を受け、『ものづくり工房』でお手玉作りや魚拓などを体験する団体客向けの体験プログラム。小学生の修学旅行などを中心に、毎年2千人以上の方が参加しています。

寺子屋体験学習で『師匠』を務めるのは、教員経験者、登別市文化協会や郷土資料館ボランティアグループ『SLG』の会員、芸術文化の造詣が深く積極的に活動を展開している方たち。これまでの経験や知識を生かし、登別伊達時代村と連携して、観光産業や地域文化の振興に尽力しています。

今回は、登別伊達時代村寺子屋・ものづくり工房の顧問を務める小林さんに、寺子屋体験学習への思いを伺いました。

『日本人』の心を後世に伝えていきたい



昭和14年、兵庫県西宮市生まれ。77歳

長年、教員として活躍。退職後、登別市文化協会会長（現在は顧問）などを務めていたときに、登別伊達時代村から寺子屋事業実施の相談を受ける。仲間を集め教本作成などを行い、現在は寺子屋の『師匠』の一人として活動しているほか、地域の歴史の研究や短歌でふるさとを詠むなど、さまざまな文化活動を行っている。